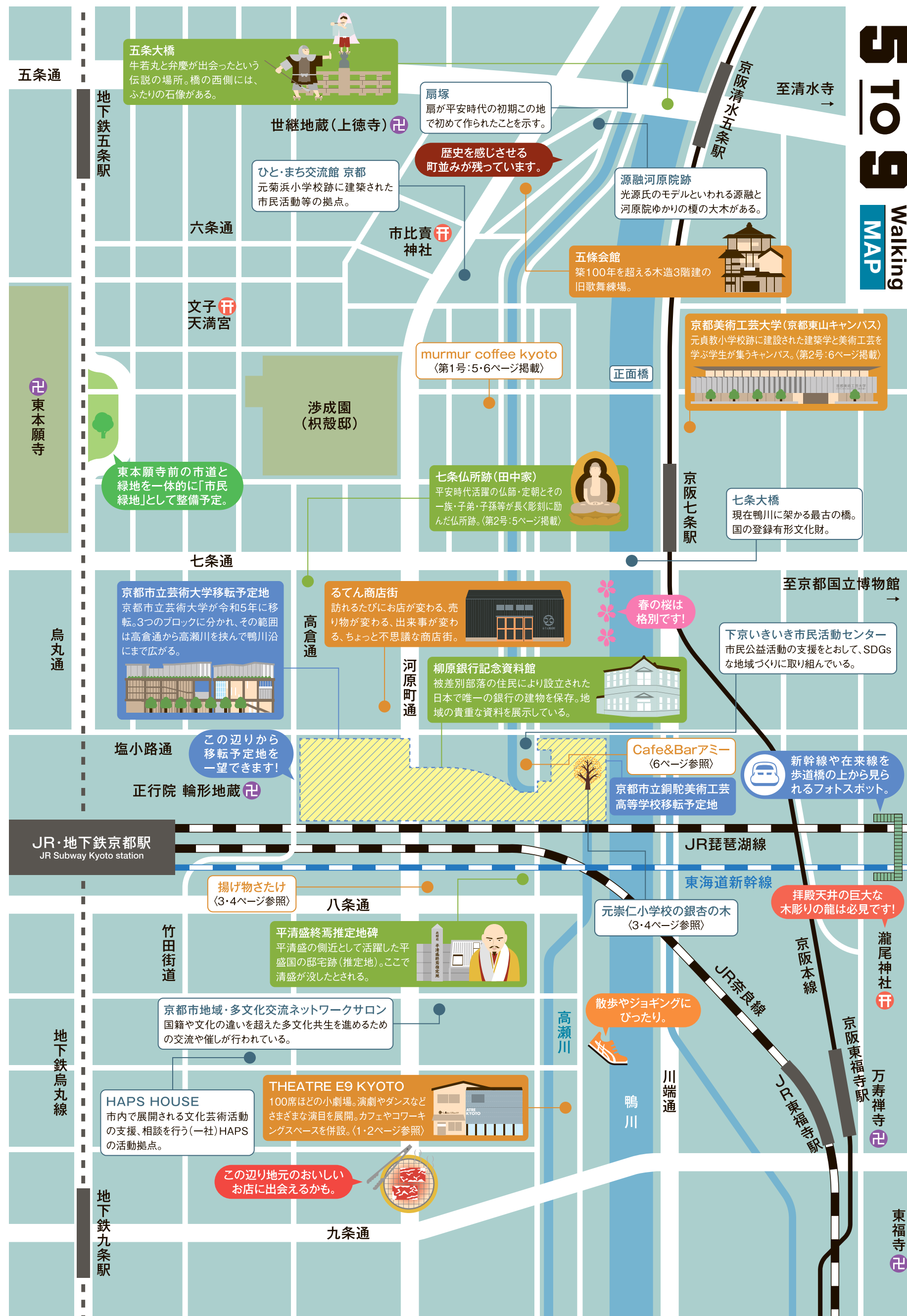


／お散歩しながら、このまちの文化と出会おう。／



京都駅東部エリアのカルチャーを発信。／5to9(ゴトウナイン)／ プロジェクトマネージャー | 桜井 肖典(RELEASE) 編集 | 森田 利浩(実業広告社) 編集協力
あこうとし(アーテシード京都)・小山田 徹(京都市立芸術大学)・田中 都后(曙灯舎)・清 三太郎(梅湯)・山内 一正(灰孝本店・murmur coffee kyoto) 執筆 | 高島 夢子
(editplus)・津曲 克彦 アートディレクション・デザイン | 野田 幸弘(実業広告社) 撮影 | 鈴木 誠一・秀平 琢磨 印刷 | 株式会社シーズクリエイト 京都市印刷物 第
024899号(令和3年3月)発行／京都市総合企画局プロジェクト推進室 TEL.075-222-3176(土、日、祝を除く 午前8:45～午後5:30) FAX.075-213-0443
*本誌記載内容の無断転載は御遠慮ください。



京都駅東部エリアのカルチャーを発信。

5 to 9

KYOTO East side Gojo-dori St. to Kujo-dori St.
CULTURE JOURNAL

vol.
03

| Special Interview |

あこうとしさんが語る 劇場、地域、芸大移転。



街のあの人、あの場所へ。

元崇仁小学校の部材からつくる
ウクレレに込められた思い。

～京都市立芸術大学の移転整備プレ事業・
元崇仁小学校『建築物ウクレレ化保存計画』～



移りゆくまちプロジェクト

アート作品でつながる若手アーティストと地域。
揚げ物さたけでのアート展示



街のあの人、あの場所へ。

街を見守り続ける、アートにあふれた喫茶店。
Cafe&Barアミー





Profile

あごうさとし
(THEATRE E9 KYOTO芸術監督)

劇作家・演出家。「複製」「純粋言語」を主題に、有人・無人の演劇作品を創作。2017年度京都市芸術新人賞受賞。第7回京信・地域の企業家アワード優秀賞。第39回京都府文化賞奨励賞受賞。一般社団法人アーツシード京都代表理事、京都芸術大舞台芸術センター主任研究員、同志社女子大嘱託講師。

あごうさとしさんが語る劇場、地域、芸大移転。

京都市立芸術大学の移転によって生まれる多様性が街に新しい風を吹かせるのが楽しみです

東九条に誕生した劇場

「THEATRE E9 KYOTO」

「多様性が重なり合うことで生まれる、舞台芸術の新たな可能性を期待している」と話すのは、劇作家・演出家であり、令和元年、東九条にオープンした劇場「THEATRE E9 KYOTO（シアターイーナインキョウト）」の芸術監督を務めるあごうさとしさんだ。ファンから「E9」と呼び親しまれているこの劇場では演劇やダンスといった舞台芸術の公演を行うのみならず、地域の子どもたちとのワークショップや若手アーティストの創作の場としても活用されている。



舞台芸術の

可能性を期待して。

「アーティストの創作に向き合う基本姿勢は、まず世の中の当たり前を問い直すことから始まります。このことは、コロナ禍の暮らしの中で全ての人が一様に体験することになりましたから、全ての人が芸術家になったのかもしれませんが（笑）」と話すあごうさん。「演劇は過去に誰かが記した言葉、つまり戯曲に向き合って、現在の私たちの身体を用いて更新し、未来に向かって語りかける運動とも考えられます。ギリシア悲劇に始まる紀元前500年頃から現代までの長い歴史の中で、数々のアーティストによって問い直され、その表現形式を少しずつ変化させてきました。ただ、科学技術のように、数字だったり、目に見えてはっきりと何かが変わるわけではないですし、一般的には理解されにくいですよね。『そんなこと当たり前なのに、なんでわざわざ考えるの?』って。でも劇場という生身の観客と対面した場所で、その都度、アーティストが上演する舞台芸術には、観客に独特の

高揚感を与え、想像力をかきたてる魅力があると思っています」。

100年つづく劇場をつくろう。

平成27年から29年にかけて、京都にあった数々の小劇場が閉館していったことに強い危機感をもったあごうさんが「100年つづく劇場をつくろう」と、場所を探し始めて一年が経った頃、出会ったのが東九条の倉庫として使われていた物件だったという。建物の広さや高さ、地の利や持続可能性など、劇場を作るためのすべての条件を満たすこの物件を初めて見た瞬間、即決したというあごうさん。そこから地域での劇場づくりは始まりました。「ただでさえ理解されにくい舞台芸術の劇場をつくるなんて。しかもこれまで僕と縁もゆかりもない地域で。そして在日韓国・朝鮮人と日本人が共に暮らすまち東九条で。まずは地域の人にあいさつに回って、それから地域の寄り合いや祭りに参加して。地域の人と沢山ぶつかり合い、

5 TO 9

Satoshi Ago talks theatre, areas and relocation of Kyoto City University of Arts

Special Interview

分かり合えないもどかしさをお互いに感じながら、少しずつ関係を築いていきました。そうして、地域の料理店のお母さんたちが中心になって開業資金として1,000円ずつ60名分、寄付金と署名を集めていただけるまでになりました。その結果、私たちが劇場をオープンするときには、地域の多くの方々から歓迎の言葉をかけていただきました。この地域で前を向いてやっていけると思えました」。

オープンから1年半が過ぎた今は、「『公演が毎回面白いわけじゃないけれど、毎回劇場に来ることが楽しい』と言ってくれる地域のお客さんがいて。そうした声が一番嬉しいんですね」とあごうさんは振り返る。

地域と学生、お互いが歩み寄ってつくるこれからの街。

京都市立芸術大学がやってくる令和5年、そのときのこの地域について聞いてみた。「京都市立芸術大学の移転については、もちろんポジティブに受け止めています。ただ、物事が大きく変わることに対して、誰もが少なからず、怖さや不安がある」。地域との関係性を少しずつ築いていった自らの経験から「地域に対して『すべてを受け止めてほしい』と言うのは難しい。うちの劇場もそうですが、受け入れてもらうには、長い時間がかかると

思っています。『理解できないと一緒にいられない』ってお互いしんどいじゃないですか。わからなくていいんです。『ようわからんけど、おってもいいんじゃない?』くらいのスタンスで学生たちを受け止めてもらえれば嬉しいですね」と話す。続けて「この地域で劇場を運営する立場としては、まず、学生には地域との接点や関わり合いを持ってほしいと思います。学生の実体験として、地域と向き合うことで、学生にとってそれが学びや創作のヒントにもなるし、地域と学生が少しずつ歩み寄ることにもつながるのでは」と、あごうさんは話す。

最後に、これからのこの街と劇場について聞いてみた。「いろんな人がこの地域に入ってくることで、学生によって多様性が、また新たな可能性を生むと思います。暮らして経済、学びとアートが重なり合う街になっていけばいいな」。この劇場については、「京都市立芸術大学の学生や先生が、地域の人たちや企業、行政といろいろなことを話し



合ったり、実践したりする場にしていきたいと思っています。そして、街の人が公演を見に来るだけでなく、日常的に劇場に通う文化が根付いていけば」。あごうさんは、100年後の未来を想像しながら、こう話してくれた。

blue vol.1

アーティストがこの地域に入り、地域を題材に制作した映像作品と、市民とプロの撮影スタッフが一緒に制作した映画作品が「THEATRE E9 KYOTO」(3/20(土)～29(月))で上映される。料金無料(予約不要)お問合せ先:THEATRE E9 KYOTO(一般社団法人アーツシード京都)
<http://askyoto.or.jp/e9> info@askyoto.or.jp ☎075-661-2515(10:00～18:00)





アート
作品
Artwork



【作品名】 イチョウの話

【制作意図】

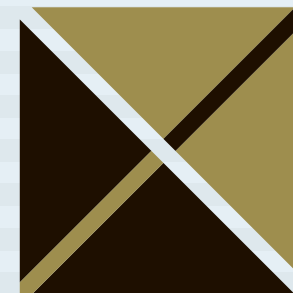
昭和6年に崇仁小学校の校庭に植樹されたイチョウの写真と、樹にまつわるお話です。

イチョウは、当時の伊東茂光校長の好きな樹だったといえます。伊東校長は、郷里鹿兒島にいた時から空に枝を伸ばすイチョウの姿を好み、崇仁においては、新校舎設置の際に植樹し、終戦直後、小学校を去る時には髪とひげを根元に埋めるほどでした。

時代は変わって、私は滋賀県で生まれ、大学に入学して京都にきました。昭和6年から同じ場所に立ちつづけるイチョウの姿は、そんな私と、私が生まれるずっと前の出来事が、途切れずに繋がっていることを思い出させてくれるような気がしました。



アーティスト 寺本遥さん
平成9年生まれ。滋賀県出身。京都市立芸術大学美術学部卒業。現在、同大学院在学中。



作品
展示
Exhibition of artwork



アート作品でつながる 若手アーティストと地域。

揚げ物「さたけ」

若いアーティストたちが京都市立芸術大学の移転予定地を題材にしたアート作品を制作していく「移りゆくまちプロジェクト」。前号で紹介したアーティスト・寺本遥さんと彼のアート作品が展示されるお店・揚げ物「さたけ」(河原町通八条上る・崇仁市営住宅1棟1階)へ足を運び、お店を営む西村武夫さん・佐智子さんにお話を伺った。

この街で“ミノとレバーの天ぷら”が人気の「さたけ」。 お店について教えてください。

佐智子さん

もともとは、団地の一角で屋台をやっていたんです。市営住宅に空き店舗が出るということで、地域でよく食べられていたレバーとミノの揚げ物店を平成13年からここで始めました。

天ぷらと言っても、要はパン粉のついた「フライ」のこと。戦中・戦後しばらくは、英語が戦争の相手国のことだったので「フライ」ということばを使うのを避けて、油で揚げたものをすべて「天ぷら」と呼んでいました。そのときの名残がこの地域には今も残っているんです。

「移りゆくまちプロジェクト」で寺本さんが制作した作品は、寺本さんの強い希望で、店内に展示されますが。

佐智子さん

今回、寺本さんが作品をわたしのお店に飾りたいと言ってきて、本当にうれしかったです。いらない貼り紙とか除くから、1枚とは言わず、壁に何枚か飾ってほしい。

武夫さん

私は先生ではないからアート作品をうまく解説することはできひんけど、なんとなくこんな作品は好きだなとか、こんな作品をつくった学生さんはいい子やなって感じるような、そんな素直な気持ちが一番なんやと思ってる。

令和5年に京都市立芸術大学がこの街に移転してくることをどのように感じていますか。

武夫さん

本当に楽しみにしています。学生さんだけでなく、先生や大学に関わる方など人の出入りが増えるから、街も変わっていくと思うよ。うちとしては、学生さんに学食ではきつと食べられないであろう「レバーとミノの天ぷら」を食べに来てほしい。令和3年には市営住宅の移転に伴って、この店はここから八条通を少し東に入ったところに移転するけど、体が動く限りは続けていきたいですね。

佐智子さん

学生さんにお店の引っ越しを手伝ってもらえると嬉しいねえ。

武夫さん

いやいや、芸術大学の学生さんなんやから、身体を使うんとかちがって、このあたりが賑わうような知恵を出してもらわなあかん。



西村佐智子さん



西村武夫さん



寺本遥さん



寺本さん

僕も大好きなさたけさんに飾ってもらえるということで光栄です。今回は、元崇仁小学校の校庭に残る、シンボリックなイチョウの木をテーマに作品を作りました。

佐智子さん

(作品を見ながら) いい写真やねえ、私はこれが好きやわ。イチョウの木を植樹した伊東校長先生は、この地域で知らない人はいない名物先生。学校の先生や親から語り継がれてるんよ。きっとこの写真を見た地域の方は、それぞれが昔のことを思い出すんじゃないかな。

寺本さん

引っ越しには友達5人くらい連れてきますよ。荷物を担ぐのはもちろんですが、お店づくりのアイデアでもお力になれることがあれば。

佐智子さん・武夫さん

ほんまに?ありがとうなあ。



元崇仁小学校の部材からつくる ウクレレに込められた思い。

～京都市立芸術大学の
移転整備プレ事業・元崇仁小学校
「建築物ウクレレ化保存計画」～



伊達伸明さん

佐藤知久さん



ウクレレの素材となる元崇仁小学校の職員室の表札や教室の床など。



ウクレレの完成イメージのスケッチ。

住宅や商店などの建築物の取り壊し時にその一部を取りだし、親しみやすく手に馴染みやすい楽器「ウクレレ」という形で保存する活動「建築物ウクレレ化保存計画」に取り組むアーティストの伊達伸明さん。現在は、京都市立芸術大学の移転整備プレ事業の一環として、昨年解体された元崇仁小学校の部材を使ったウクレレ制作を進めています。ウクレレの制作に込められた思いについて、伊達さんとこのプロジェクトの責任者である京都市立芸術大学芸術資源研究センター教授の佐藤知久さんにお話をうかがいました。

●

ー「建築物ウクレレ化保存計画」とは どのようなプロジェクトですか。

伊達さん

「建築物ウクレレ化保存計画」とは、取り壊される建物の中の、思い出深い部材を切り出してウクレレを制作し、それを再び元の持ち主の暮らしに還元していくプロジェクトです。

ウクレレには建築物の一部を用いているわけですが、その部材にはできるだけ多くの人の思いが詰まったものを選ぶことで、完成したウクレレを目の前にした人々に、その建築物にまつわるそれぞれの情景や思い出を想起してもらえるような作品にしたいと思っています。

ー今回の「元崇仁小学校のウクレレ」 の材料は、どのように選びましたか。

伊達さん

今回は、解体を控えた元崇仁小学校で、昨年、作品展を開催した際、来場いただいた方に「崇仁小おもいでシール」をお配りし、教室の黒板など、自身が残したいと思う場所にシールを貼っていただくとともに、その思い出をアンケートに記載していただきました。そのアンケートをもとに、記憶として強く印象に残っていた場所を表象する素材や、反対に、全く意識することないままに多くの人が何気なく触れていた素材を見出し、選んでみました。

まもなくウクレレが完成しますので、元崇仁小学校に思い入れのある方々にお披露目したいと思っています。新型コロナウイルス感染症の影響で、大勢が集まってというのはなかなか実現が難しい状況にありますが、なんらかの形で、直接、見て触っていただける機会をつくっていきたいです。

ー伊達さんにウクレレの制作を 依頼した経緯を教えてください。

佐藤さん

京都市立芸術大学の移転に伴い、崇仁学区の風景は大きく変化しています。伊達さんに相談したのは、建物がなくなることにもなう喪失感について、一緒に考えたかったからです。建物がなくなると、記憶がよみがえるきっかけも減ってしまいます。知らない人は、ここに小学校があったということすら知らなくなるでしょう。でも確かにここに小学校があったし、その後大学や高校が来る。その接点を形に残したいと思って、「建築物ウクレレ化保存計画」を手掛ける伊達さんに相談しました。

伊達さんのウクレレ作品の魅力は、建物そのものを部分的に残すという発想はもちろんですが、楽器としての音にあると思います。その音は、かつて建築物だったもののそのものが発するものです。建物自体が音となることで、それを聞いた人に懐かしい思い出を呼び覚ましてくれるような気がしています。

ー京都市立芸術大学の移転に際して 受け入れてくださる地域の方々に メッセージをお願いします。

伊達さん

美術に関わる者は、社会の一員として時代の空気を感じ、その時代の発想や価値差に直面して、それを受け止め、新しい表現を追求する人たちです。ただし、地域への安心感や愛着をもたらす地域活動の場面では、彼らの感性ゆえに、得てして違和感を生みがちです。でも、彼らが時間をかけて心身を磨き、地域と関わりながら跳躍する術を磨いていく姿を真珠に例えるならば、地域の方々には、この若者たちを異物として排出せず、栄養を与えながら守り育てるアコヤガイのような存在になっていただければありがたいと思っています。

佐藤さん

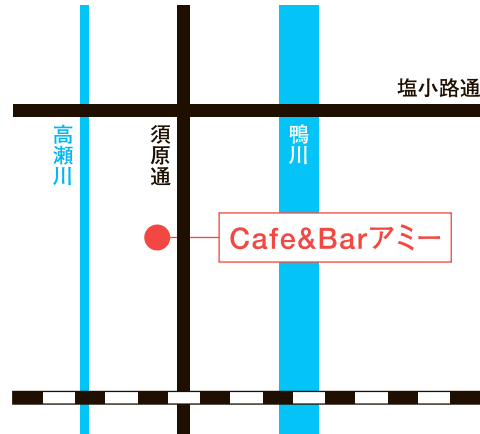
大学の建物と合わせて、ごはんを食べたりアルバイトをしたりする学生や、ここで働く教職員の生活も、この地域に移転してきます。引越してきたらお隣さんです。生活の中で、学生や教職員たちがどんな人間なのかを感じていただければと思います。「やっぱりわからへんわ」になるかもしれないし、「意外といい奴やん」になるかもしれませんが、そもそも大学は、懸命に大人になろうとする若者をみんなで守り育てるための、特別な場所です。そんな場所をこのまちに、時間をかけて一緒につくっていただけたらと思います。

街を見守り続ける、 アートにあふれた喫茶店。

Cafe&Bar アミー



京都市立芸術大学の学生が制作した看板。



営業時間／8:00～15:00 日曜休

ーCafe&Bar アミーで アート作品を展示するようになった きっかけを教えてください。

玉川さん

京都市立芸術大学の学生さんから作品を展示させてもらえないかと声をかけてもらったのが最初でした。ここに飾ってある食器や看板も、実は学生さんが作ってくれて。昨年は多くの学生有志による作品展（有志展）の会場としてお店を使ってもらいました。今はお店の2周年にむけて、学生さんたちがアイデアを出し合って、面白い展示を企画してくれています。

山田さん

僕は、崇仁市営住宅の32棟の一室をアトリエとしてお借りしているので、アミーさんのご近所なんです。お店の前はよく通っていたのですが、いつ入ろうか…と思い続けていました。大学の後輩が作品を展示させてもらったと聞いて、僕もぜひと思って今回お世話になることになりました。

ーアート作品の展示について どう思いますか。

小林さん

うちは常連さんがほとんどやねんけど、お店に飾ってる作品を作った芸大生やそのお友達がよくお昼を食べに遊びに来てくれるようになり、親しく話をするようになりました。また、飾ってある作品について、お客さんに何度も説明しているうちに愛着も湧いてきましたねえ。

玉川さん

学生さんの作品を展示するだけじゃなくて、学生さんが大学を卒業してからもアーティストとして生きていくため、お金がまわっていく仕組みを作っていくのが大切やと思ってます。店に作品を飾ってくれた学生さんには、たまに店に来てお客さんに自分の作品の説明をしてみって言ってるんです。自分で作って、自分で説明して、で作品を買ってもらえたら、学生さんの自信にもつながる。そうやって学生さんを応援していきたいです。



玉川元城さん



小林節子さん



京都駅から塩小路通を東に進み、鴨川のほど近くにあるCafe&Barアミー。40年以上にわたり地元で愛され、この街を見守ってきました。2年前に現在の場所で新装して以来、お店では若手アーティストの展示が盛んにおこなわれています。3月26日からの新たな展示企画にむけて、Cafe&Barアミーのオーナーの玉川元城さんと玉川さんの御祖母さんでお店を切り盛りしている小林節子さん、そしてアーティストの山田毅さんにお話をうかがいました。

ー今後の京都市立芸術大学と 地域との関係について どう思われますか。

小林さん

今は人通りも少ないけれど、賑やかになるでしょうねえ。学生さんたちにはこの街でのびのびと過ごしてほしいです。私は1日お店にいるから、お店の前の通りを歩いている人を見続けてます。「あの奥さん最近見かけへんけど元気にしてるかなあ」って思ったり、久しぶりに見かけた人には「最近何してはったん?」と声をかけたり。そんな感じで学生さんを見守っていきたいです。

山田さん

今はアート作品の展示をお願いしたりすることでしか地域との交流が生まれませんが、学生がやって来て生活が始まったら、あいさつや日常のささいなやりとりも自然とできますし、そこからスムーズなコミュニケーションが生まれることを期待しています。そして、少しずつ時間を重ねるなかで、大学の周辺にアミーさんのような、アーティストがアーティストらしく活躍できるよう見守ってくれる場所が増えていくといいなと思います。

玉川さん

昔と比べると若い人が少なく、地域に活気がないです。学生さんたちは純粋でやる気があるので、うちの店とかにそれをぶつけてもらって、地域にアーティストならではの刺激を起こしてほしい。京都駅が近いのに人がいなく殺風景な須原通がゆくゆくはアートストリートになって、賑やかになれば嬉しいなと思います。



山田毅さん

山田毅さんの展覧会

「オルガンを鳴らす」
令和3年3月26日(金)～4月10日(土)

会場：Cafe&Barアミー

下京青少年活動センターで使われなくなったオルガンを使用して作品を制作し、展覧会を開催します。展覧会期間中、不定期で京都市立芸術大学音楽学部が学生がオルガンを演奏します。